

「伝わる」思い

松江市立第二中学校 二年 三浦夕歩

「ごめん」

たった一言、そう言っただけでした。「ごめん」と言ったけど、私は今でも後悔していることがあります。

私が小学校五年生の時、仲の良い友だちが大切にしていたキーホルダーを壊してしまいました。不注意ではありませんでした。友だちをびっくりさせようと思って、キーホルダーを椅子の上に置きました。でも友だちは、そこに大切なキーホルダーがあるとは思わず、そのまま椅子に座ってしまいました。私はまさか壊れるとは思っていませんでした。友だちがそこに座るとも思っていませんでした。わざとではありませんでした。でも…キーホルダーは壊れてしまったのです。椅子の上で壊れたキーホルダーを見た友だちの顔を私は今でも忘れられません。怒りと悲しみ、困惑が入り混じった顔でした。いつも笑っていることが印象的な友だちです。怒ったり、悲しんだりすることはあまりない友だちのあの時の顔を私は今でも覚えています。

この時、私は、友だちが大切にしているということをわかっていたので自分がしてしまったことの重大さをすぐに理解することができました。私は、罪悪感と嫌われてしまう恐怖心で、「私がやった」とは言い出せませんでした。だけど…私が言い出せなかったせいで、全く関係のなかった友だちがやったことにされてしまいました。私は、どうしよう、私のせいなのに、でも…とぐるぐる様々な思いが巡りました。私がキーホルダーを椅子の上に置いた、という事実を自分から言わなければと思いつつも勇気が出ませんでした。

私の代わりに「悪者」にされてしまった友だちが悲しんでいる姿をみて、私はようやく決心がつき、「謝ろう」と決心しました。実際に謝罪しようと思ったけれど、もう私は仲の良かった友だちと友だちではいられなくなることも、黙っていたことで嫌われてしまうだろうこともわかりました。怖かったです。

私が嫌われるとしてもそれは私のしたことです。しかし、それよりも、大切な友だち二人が私の軽率な、そして自分勝手な行為によって傷ついている姿を見ることの方が何倍も苦しかったです。私は、ある日の放課後、一対一で謝りたいと思って、仲の良かった友だちを呼び出しました。本当は、もっといろいろなことを言わないといけなかったのですが、その時の私は一言が精一杯でした。友だちの顔も見ずに「ごめん」と一言言っただけ。顔を見なかったのではなく、正しくは見られなかったのです。沈黙の時間が、少し続きました。友だちからは何の一言も返ってこなくて私は不安になり、一瞬だけ顔を見ました。不安で怖くて、でも、許してもらえるのではという思いもありました。しかし、友だちの顔は違っていました。友だちは驚きとともに「嘘でしょ？」という顔をしていました。私は後悔しました。友だちは、それまで私のことを信じていてくれたのだと一瞬でわかりました。理解した瞬間、私は自分が情けなくて涙が止まらなくなりました。

私が「ごめん」と顔を見ずに言ったのに、友だちは私をしっかりと見てくれていまし

た。少しだけ残っていた怖いという感情に負けて、目を見て謝ることのできなかつた自分が今でも許せません。あの時、ちゃんと目を見て、しっかり頭を下げて謝ることができていたら、言葉以上のものが伝わっていたと思っています。

私たちは、自分一人で生きているわけではありません。言葉は、人間がもつ大切なコミュニケーションツールです。言葉の力は、人と人の関係を良くもするし、悪くもします。しかし、その大切な言葉だけでは伝わらないことがあるということを私は小学校の時の経験から学びました。

誰にも、誰かに何かをきちんと伝えなければいけない時はあると思います。それは「ごめんなさい」「ありがとう」「私はこう思う」というような言葉に心を込めるような場面もあります。その他にも、もっと日常生活の普通の場面でもたくさんあります。「おはよう」「バイバイ」のあいさつ、名前を呼ばれたときの返事、授業などでプリントを後ろの人に回して渡すとき。「相手の目を見る」という行為は相手を尊重し、自分の意志をしっかりと伝える上でとても大切なものだと思います。

私は小学校の時に自分が遊び半分ですってしまったことも、友だちの思いを想像できなかつたことも深く後悔しました。きちんと目を見て謝れなかつたことも、同じように友だちの思いを想像できなかつたのだと思っています。相手のことを理解しようとする想像力とそれをきちんと表す行為は、人と人の関係をより良いものにしていくということを、そしてそれは私たち人間に与えられた素晴らしい力だということを忘れずにこれからも生活していきたいと思っています。